

## 口永良部島で観察した淡水魚類

池 俊人

### Freshwater Fishes observed in Kuchinoerabu-jima Island, Kagoshima Prefecture

Toshihito IKE

#### はじめに

口永良部島は屋久島の西方約12kmに位置する火山島である。2015年5月29日に新岳が噴火するなど、火山活動が活発に行われている。島内には小規模な河川がいくつかあるものの、口永良部島の淡水魚については、これまで断片的な情報があるだけである（中坊編, 2013；米沢・四宮, 2016）。今回、口永良部島で淡水魚類の採集調査を行う機会を得たので、その結果を報告する。

#### 調査地点

筆者は2016年10月26日と27日の2日間、島内の河川や湿地の4水系5地点（図1, 表1）において、淡水魚類の採集調査を行った。採集方法にはタモ網を用いて、1地点あたり数十分間の採集を行うこととした。採集した魚類の一部は当館に持ち帰り、同定に供した。同定には中坊編（2013）を用い、本報告で使用した標準和名もこれに従った。



図1 口永良部島での調査地点

A: 岩屋泊地先の川；B: 本村地先の湿地；  
C・D: 本村地先の川；E: 湯向川

表1 調査地点の概要

地点	水系	河川形態	流幅 (m)
A	岩屋泊地先の川	下流部	1.5
B	本村地先の湿地	湿地と小河川	0.5-3.0
C	本村地先の川	下流部	2.0
D	〃	側溝	1.0
E	湯向川	下流部	1.5

A は島の西部にある河川で、下流部は傾斜も小さく、緩やかに海岸に流下していた（図2）。



図2 地点 A(岩屋泊地先の川)

B はかつて水田だったが、現在は耕作放棄されて湿地となっており（図3）、その中を小河川が流れ、途中の流れが緩やかな場所にはホテイアオイが水面に密生している。さらに流下した先の本村集落では暗渠となり、本村港で海岸に達する。



図3 地点B(本村地先の湿地)

CとDは同じ河川だが、Bの河川よりもわずかに東側に位置する。この河川もBの河川と同様に本村集落内では暗渠となり、本村港で海岸に達する。Cは海岸の護岸から海までの数十mの範囲で(図4)、砂礫の間や植物の根元などに魚類や甲殻類が生息していた。Cより上流にあるDは金岳小・中学校の前に位置し、コンクリート三面張りの側溝で(図5)、底には砂利が堆積し、魚類の他にオニヌマエビやテナガエビ類も多数生息していた。



図4 地点C(本村地先の川)



図5 地点D(本村地先の川)

Eは島の東部にある湯向川の下流で、温泉からの温排水が流入しているため水温が高かった。河口付近では人頭大の転石の間を、急傾斜を海に流下している(図6)。



図6 地点E(湯向川)

### 結果と所見

今回、口永良部島で確認できた淡水魚類は、5科8種であった(表2)。

表2 観察した淡水魚類

標準和名	地点別の観察個体数					標準体長(mm)
	A	B	C	D	E	
ニホンウナギ		1				約130
ドジョウ		1				約60
オオクチユゴイ			5			19.7-26.5
ユゴイ			11			20.4-52.0
テンジクカワアナゴ		2	1			34.0-79.0
ボウズハゼ				3		28.3-46.0
ナンヨウボウズハゼ	3					17.3-19.2
クロヨシノボリ		6	1		1	26.8-50.0

種数は非常に少なく、純淡水魚はドジョウのみであった。その他はすべて通し回遊魚である。原因としては口永良部島の地史の他に、陸水域の規模が極めて小さいことや、度重なる火山噴火の影響などが考えられる。

確認された通し回遊魚の分布域をみると、オオクチユゴイ、ユゴイ、テンジクカワアナゴ、ナンヨウボウズハゼなどの、琉球列島を主な分布域としている種が多いことが分かる。黒潮による仔魚が散布されたことで、口永良部島に生息していることが強く示唆される。

今回確認できなかった淡水魚類としては、オオウナ

ギが挙げられる。口永良部島ではしばしば観察されており、当館の久保紘史郎氏も2016年11月17日に前田集落近くの金ヶ迫川で、全長約1mの個体を観察している(図7)。

文献によれば、口永良部島からは他にもルリボウズハゼが確認されている(中坊編, 2013; 米沢・四宮, 2016)。米沢・四宮(2016)は、さらにタウナギ属の1種を目撃例があることも述べている。今回はこれら2種を確認できなかったが、今後も調査が行われて、より知見が蓄積されることが期待される。



図7 金ヶ迫川で観察されたオオウナギ

2016年11月17日(撮影:久保紘史郎)

## 謝辞

一般財団法人鹿児島県環境技術協会の米沢俊彦氏には、口永良部島の淡水魚類の情報について教えていただいた。また、当館の久保紘史郎氏には、現地で撮影したオオウナギの写真を提供していただいた。本研究は、公益財団法人自然保護助成基金第27期(2016年度)プロ・ナトゥーラ・ファンド助成を受けたものである。ここに感謝申し上げる。

## 引用文献

- 中坊徹次編(2013)日本産魚類検索 全種の同定, 第三版, 415pp. 東海大学出版部, 秦野.
- 米沢俊彦・四宮明彦(2016)汽水・淡水産魚類, 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編—鹿児島県レッドデータブック2016(鹿児島県環境林務部自然保護課):71-108, 一般財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.

